

大雨に関する予報について(その2)

大雨などで河川が増水、はんらんし、陸地が水浸し、水没することを「洪水」といいます。洪水の場合、「洪水注意報」などの予報（気象庁）のほか、甲子川、鵜住居川の水位に関する「はんらん注意情報」などが発表（県）されることがあります。



平成 19年9月の台風9号による甲子川が増水

○ 洪水注意報 (市町村単位)	洪水による災害発生の恐れを注意する予報。当市の場合、平たん地で1時間の雨量が30mm（現在は暫定で25mm）を超える可能性があり、流域雨量指数（河川流域のこれまでの雨量と今後数時間の予想雨量による洪水危険度予想指数）が、基準（河川により異なる）に達しそうな場合に発表されます。
○ 洪水警報 (市町村単位)	洪水による重大な災害発生の恐れを警告する予報。当市の場合、平たん地で1時間の雨量が50mm（現在は暫定で40mm）を超える可能性があり、流域雨量指数が基準に達しそうな場合に発表されます。
○ はんらん注意 情報など (河川単位)	洪水で重大な被害の危険性があると国や県が指定した河川（当市の場合甲子川、鵜住居川が県から指定）では、水位計による水位観測を行っています。設定した水位を超過した場合の災害発生の可能性について、水位の低い順に「水防団待機水位」「はんらん注意水位」「避難判断水位」「はんらん危険水位」の4段階で発表されます。

水位計の観測値は岩手県河川情報システムのウェブサイト

(<http://kasen.pref.iwate.jp/iwate/servlet/Gamen30Servlet>) で見るすることができます。

防災行政無線の放送内容を無料で確認できます。ぜひご利用ください。(☎0800-800-3199)

いのちを守る — 教訓と備え —

震災前、花露辺漁村センターは地域の避難所で、避難訓練でも使っていたため、震災時でも使えらなかつた。自主防災組織は結成していなかつたが、日ごろから町内会役員を中心に避難所運営を行っていた。そのため、最大時で134人も避難者がいたが円滑な運営ができた。

地域には漁業者が多く、漁業用発電機で電気と暖房をいち早く確保することができ、女性部を中心に食料の調達、炊き出し体制も確保した。また、町内会の役員を中心に、役割・責任分担を明確にしたことがよかつた。毎夕、スタッフ会議を開き、市から収集した支援の内容や被災状況の情報共有・周知を行いなから被災者を安心させることに努めた。

震災あの日あの時

〔避難所編〕

1

下村 恵壽さん

(花露辺町内会会長)

避難所:花露辺漁村センター(当時)

「地域のつながりと情報の重要性を実感」

特に留意したのは心身に不安を抱えている人へのケア、被災した・しない人を分け隔てしないことだつた。そのため、地域全体で夕食をとりながら情報共有することを心がけた。

また、流行性感冒や食中毒防止のため、早期の避難所閉鎖を目指し、1カ月後の4月11日に避難者ゼロを達成することができた。その間、健康管理としてラジオ体操とウォーキングを日課としたほか、避難所衛生維持のため仮設トイレを男女分けて使用するようにした。

多くの方々からの支援にも恵まれ、物資についてはほかの避難所より恵まれていた。震災当日からご飯を食べることができ、以降も1日3度の食事をとることができた。また、日ごろからのコミュニケーションのおかげで、震災から4日目には地域内全家族の動向、避難先なども把握でき、住民の安心感につながつた。

震災を通じ、改めて正確な情報の把握、日ごろからの地域のつながりの大切さを実感した。